レビー小体型認知症（DLB）に対する当事者および家族への支援プロジェクト

阿部　宏史[1]，　本多　容子[1]，福岡　裕行[2]，　中井　良育[1]，　三宅　光代[1]，

[1] 藍野大学　看護学科　[2] 訪問看護ステーションふるる

報告概要　藍野大学内に設置しているレビー小体型認知症サポートネットワーク大阪（以下、DPBSN 大阪）の DLB カフェおよび勉強会/家族交流会を通して活動が周知され、茨木市内および北摂地域で協力関係のある専門職が増えてきた。DLB カフェに参加する家族も増え、家族同士の支え合う姿も見られた。

１．はじめに

認知症の有病率は「令和 22 年に 584.2 万人」[1] と推計されており、DLB はアルツハイマー型認知症，脳血管性認知症に次ぐ、3 番目に多い認知症として知られている．

２．プロジェクト目的（あるいは目標）

本プロジェクトは、認知症施策推進大綱が推進をしている地域の専門職とともに DLB を中心にして理解を深め、本人発信支援や家族介護者の支援を行い、認知症バリアフリーの取り組みを行うことを目的とする。

３．実施内容

DLB に特化した「DLB カフェ」を毎月第 3 土曜日に運営し、年 3 回「勉強会/ご本人・ご家族の交流会」も開催している。

４．結果・今後の展望

今年度、視野に入れていた専門職との協力関係は、作業療法学科の教員および薬学、看護の他大学の教員が加わった。また、医療機関の認定看護師、地域医療連携センターの職員も加わり、茨木市内の幅広い専門職も運営に加わる体制となった。

2024 年度に DLBSN 大阪で行った勉強会において、特徴的なこととして、10 月に認知症看護認定看護師が 3 名が揃って行った勉強会であった。「認知症ケアで大事なことは，認知症を正しく理解し，認知症の人が抱いている世界観や思いを汲み取ることである」[2] と述べられているが、症状に個人差のある DLB は、アルツハイマ―型認知症とと同様の対応では難しく、実際に現場でケアを行っている看護師が、背景事情を考慮した実践を説明することで家族が抱えた悩みに応えた勉強会になり、3 月の勉強会にもつながったと考える。

表 1　勉強会参加人数（全 3 回）

6 月 30 日	10 月 19 日	3 月 15 日
14 名	24 名	50 名

本人・ご家族に関して、藍野大学近隣の住人は元より、近隣市町村の本人・ご家族が DLBSN 大阪のホームページの活動の周知を目にして、DLB カフェに参加する事も多くなった。「家族介護者にとっての認知症カフェの位置づけは、知識や情報を得る場である」[3] とされている様に、DLB カフェで在宅で過ごすための悩みを相談し、接し方を教わったり、どの様な施設が良いか情報を得たりする場として参加している人も多かった。また、自分の体験談を話す場としても機能しており、DLB 特有の症状をご家族同士で相談し合う場面も多く見られていた。

写真 1　DLB カフェの様子

今後の展望として、大学でカフェを行う意義として、「正しい情報を選別し、最新の政策・制度情報を地域住民に発信していく」[4]の役割があると述べられている。当カフェに来訪される家族にとって、ニーズに合った正しい情報を求めていると考えられ、期待に応えらえれる運営をしていく必要がある。

[1] 二宮利治，小野賢二郎，伊賀淳一，他：認知症及び軽度認知障害の有病率調査並びに将来推計に関する研究，老人保健事業推進費等補助金（2023）

[2] 窪田裕子,三品雅洋：【認知症ケアチームの実践のために】認知症看護認定看護師の役割と育成, 老年精神医学雑誌,31,8,859／866（2020）

[3] 奥永盛太, 兼田絵美, 久保英樹, 他：認知症カフェに参加する家族介護者の思いの分析, 認知症ケア研究雑誌, 7, 32／38（2023）

[4] 秋定真有, 坪井桂子：看護大学が取り組む「もの忘れ看護相談」における活動報告:8 年間の活動の振り返りと今後の課題の検討, 神戸市立大学紀要, 24, 69／77（2020）